

白雲片片

第二十二回

五老峰

瑩山禪師が海野三郎滋野信直夫婦より能登国酒井（石川県羽咋市酒井町）の地を寄進され、草庵を結んだのは正和二年（一二三二年）、これが後の洞谷山永光寺である。ここでは永光寺の最奥に安置されている『五老峰』を中心に述べたい。なお、不詳な部分があるため、宗門以外

の人物の法階、敬称は省略した。

五老峰は瑩山禪師が永光寺に建立した開山堂『伝灯院』の後ろに位置し、小さな丘の上に石塔が立っている。開創当時の永光寺の伽藍は度重なる兵火により灰燼に帰したようであるが、五老峰だけは難を逃れ、七百年近くの時を経た今も瑩山禪師が建造した当時のままであり、そこには左に記すものが納められている。

- ・如浄禪師の語録
 - ・道元禪師の靈骨
 - ・懷奘禪師の血経
 - ・義介禪師の嗣書
 - ・瑩山禪師の嗣書
- 永光寺に伝わる瑩山禪師の真筆『洞谷

山永光寺尽未来際置文（国指定重要文化財）には次のように記されている。

能州酒井保洞谷山は酒匂八郎頼近の嫡女、平氏の女、法名祖忍、清浄寄進の浄処なり。ゆえに、紹瑾、一生偃息の安樂地となし、来際、瑩山遺身安置の塔頭所となす。ここをもつて、自身の嗣書、先師の嗣書、師翁の血経、曾祖の靈骨、高祖の語録を当山の奥頭に安置し、この峰を名づけて五老峰と称す。しかれば、当山の住持は五老の塔主なり――

この時、瑩山禪師は加賀の大乗寺ではなく永光寺を終生の地とし、遷化後も永光寺に眠ることを望んでいたようである。永光寺の住持は釈尊以来の正嫡を意味し、永光寺を本山格の寺院にするつも

りでいたのではないだろうか。

この置文が書かれた時（元応元年、一三一九年）、総持寺はまだ開創されておらず、永平寺は三代相論を機に急速に衰退し、道元禅師直参の四世義演禅師はすでに遷化しており、瑩山禅師と同世代の後に中興と称えられる義雲禅師が五世として入山し復興の最中であつた。また、義介禅師の法嗣は瑩山禅師一人であり、瑩山禅師の上足、明峰禅師や峨山禅師らは既に門弟となつてはいたが、まだ嗣法を許されていない。道元禅師直参の寂円禅師や義尹禅師らの弟子たちが各地で禅風を奮つてはいたが、それでも道元禅師の法系は風前の灯であつたことに違ひはないだろう。よつて、この置文が書

かれた当時の瑩山禅師の置かれた立場が自然と浮き上がってくる。

瑩山禅師が五老峰を建造した経緯を説明するにあつて、日本達磨宗（以下、達磨宗）と義介禅師の関係を外すことはできない。前日も書いた通り、道元禅師の会下で特に重きを成したのは達磨宗より参じてきた者たちである。まず単独で懐奘禅師が訪ねており、その後懐鑑えかんが率いる義介禅師や義演禅師らが集団で参じた。

懐鑑は達磨宗、覚晏かくあんの後継者である。達磨宗は開祖の能忍のうにんが無師独悟であつたために当時の仏教界から批判を受けしたが、宋の阿育王寺あしよかおうじ、拙庵徳光せつあんとくこうへ弟子を遣わし、文書のやりとりのみで印可証

明を受け、臨済宗大慧派だいえはに属すことで発展したが、再び弾圧を受けて衰退した。

道元禅師が正師参学、面授嗣法を強調した背景には、自身の会下に多くの達磨宗出身者がいたことが一つの要因ではないかと推測されている。また、道元禅師の存命中、義介禅師は道元禅師の門弟ではなく懐鑑の門弟であり、あくまで達磨宗に属する立場であつたようである。それは道元禅師も認めており、達磨宗における義介禅師の名は『義鑑ぎかん』であつた。義介禅師は晩年に達磨宗の嗣書を曹洞宗の嗣書の助証として六祖普賢舍利と併せて瑩山禅師に付与しているが、その際の書状にも『義鑑』の名を用いて署名していることから、義介禅師は一生を

通じて日本曹洞宗の三祖であり、また達磨宗の正嫡としての自負があったと思われる。この書状の中には「懷奘禪師は道元禪師から本当に嗣法を受けたのかどうかという疑いを抱く者がいるが、これらの言葉を信じてはならない」という記述があり、当時、懷奘禪師の嗣法について疑念を抱く者がおり、その法嗣である義介禪師に対しての疑念はより一層大きなものであった。伝法の儀式自体が師匠と弟子のみによつて秘密裏に行われるものであるから、懷奘禪師からよりも先に達磨宗より嗣法を受けたことが周囲に認知されていた義介禪師が、曹洞の嗣法を本当に受けたのかどうか、そして曹洞臨済における二重嗣法の可能性

を永平寺の大衆から疑問視されていたことが、多数の古文書より読み取れる。

義介禪師が曹洞臨済の両宗から嗣法していることは上記の書状の存在で明らかであるが、永平寺において義介禪師が行った先進的な伽藍整備や新たな清規の制定、密教的な要素の導入も相まって、道元禪師の枯淡な遺風を慕う大衆たちからの信任を得られず、義介禪師の出身氏族と遠戚関係である大檀那の波多野氏の仲裁も虚しく、遂に永平寺から退かざるを得なくなったようである。

三代相論の初期の大概は以上である。懷奘禪師は道元禪師よりも二歳年長であったため、「我が宗を断絶せしむることなかれ」との如浄禪師からの嚴命もあ

つてか、道元禪師は何としても若い法嗣を育成しなければならぬ責務を感じていたに違いない。その期待こそが、若く聡明で道心篤い義介禪師にかかつていたのであるが、道元禪師の遷化によつて遂にその大望は叶わなかった。

それにしても、なぜ義介禪師は二重に嗣法を受けたのか、なぜ懷奘禪師は義介禪師が懷鑑からすでに臨済の嗣書を伝授されていたのにも関わらず、重ねて曹洞の嗣書を伝授したのか、その詳細な理由が分からない。病床にあった道元禪師と義介禪師の会話が記録されている義介禪師の日記『御遺言記録』に依れば、懷鑑が遷化して間もなく行われた道元禪師と義介禪師の密談を懷奘禪師は目

の前で聞いていたと記されているから、義介禅師と達磨宗との関係がどのようなものであるか、懐奘禅師は十分に理解していたと思う。また、御遺言記録からは懐鑑と義介禅師は強い信頼関係を築いていた様子が伝わり、懐奘禅師と懐鑑は共に覚晏に参じた兄弟弟子である。義介禅師は、たとえ永平寺の要職に就き、道元禅師より法嗣の器として多大な期待を寄せられていても、懐鑑が護つてきた臨済の法灯と、達磨宗の本拠地であった波著寺はじやくじの住持位と一切の法具も自身が受け継ぐことで、能忍、覚晏、懐鑑への恩に報いようという思いがあつたのではないか。また、懐奘禅師は参学の師僧を替え、道元禅師の法嗣となり、その

宗風を継続し高揚することに全身全霊、粉骨碎身したとはいえ、本来は達磨宗出身であり、若い頃から共に弁道精進した懐鑑、達磨宗侶としての義介禅師の立場についても深い理解と複雑な思いを抱いていたのではないだろうか。

最後に瑩山禅師が五老峰を建造した目的をまとめてみると、まず第一に『如浄・道元・懐奘・義介・瑩山』と続く系譜が釈尊以来の正統な法系であることを主張するため、そして達磨宗が相続してきた臨済の法灯を自らの手によつてこの地にて断絶させること、自身の法孫には純一な曹洞のみの法灯を伝え、後々紛争の種に成りかねないあらゆる可能性を五老峰によつて清算すること、今後

の曹洞宗は永光寺が中心であることを内外に知らしめることなどであろう。

義介禅師が複雑な苦悩を抱きながら生涯護持した達磨宗の法灯を断つことは瑩山禅師にとつて大変に苦渋の選択であつたと思われるが、後に明峰禅師と峨山禅師を代表とする瑩山禅師の弟子たちの活躍により、北陸の小規模な教団に過ぎなかつた曹洞宗は日本全国へと展開され大躍進を遂げるのである。

参考文献／孤峰智璨編著「常濟大師全集」、東隆眞編著「徹通義介禅師研究」、曹洞宗宗務庁版「伝光録」、曹洞宗宗学研究所編「道元思想のあゆみ1」、大久保道舟編著「道元禅師全集上下巻」駒澤大學編「禪學大辭典」等